

探究活動に意欲的に取り組む

総合的な学習の時間の指導に関する研究

―見通しをもたせる「北っ子プラン」の活用をとおして―

大槌町立大槌北小学校 教諭 小 國 博 文

I 研究目的

総合的な学習の時間では自ら課題を見付け、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する「生きる力」の育成が求められている。ここでは、学習者の主体的な探究活動を中心にして問題解決を行い、学習者が学習の対象である事物や事象とのかかわりの在り方に気付き、考えることができるようにすることが重要である。

しかし、本校の児童の実態をみると、学習の仕方を身に付け、自らの課題について探究しようとしているものの、積極的・能動的に自分の課題を見付け、解決方法を考えながら学習を進めようとする意欲が十分でない面がみられる。それは、児童が自分の探究しようとする課題に対して目的意識が明確でないことや解決方法の見通しが十分でないこと、そして、課題解決の情報源である「人・もの・こと」の活用の仕方についての教師の支援が十分でなかったことによるものと考えられる。

したがって、このような状況を改善するためには、探究活動の過程をとおして、児童自身の力で活動の全体を計画できるように支援し、自分たちで決めた観点に沿って活動をふり返る自己評価・相互評価等を積極的に取り入れていくことが必要である。

そこで、この研究は総合的な学習の時間において、児童が活動を見通すことのできる計画「北っ子プラン」を活用することによって探究活動に意欲的に取り組む指導の在り方を明らかにし、総合的な学習の時間の指導の改善に役立てようとするものである。

II 研究仮説

総合的な学習の時間の探究活動において、活動全体の見通しをもたせることができる「北っ子プラン」を次のような学習活動に活用すれば、児童は自分の意志で学習しているという意識が高まり、探究活動に意欲的に取り組むことができるであろう。

- ・探究活動の目的や方法、自分の役割を自分で決めて見通しをもたせるための計画を立てる活動
- ・自分で決めた計画を探究活動の中で見直しながらよりよい解決方法へと修正するふり返りの活動

III 研究の内容と方法

1 研究の内容

- (1) 探究活動に意欲的に取り組む総合的な学習の時間の指導についての基本構想の立案
- (2) 手だてにかかわる実態調査及び調査結果の分析と考察
- (3) 見通しをもたせる「北っ子プラン」の活用を取り入れた総合的な学習の時間の手だての試案の作成
- (4) 指導実践

- (5) 実践結果の分析と考察
- (6) 探究活動に意欲的に取り組む総合的な学習の時間の指導に関する研究のまとめ

2 研究の方法

- (1) 文献法 (2) 指導実践 (3) 観察法 (4) 質問紙法

3 指導実践の対象

大槌町立大槌北小学校 第4学年（男22名 女19名 計41名）

IV 研究結果の分析と考察

1 探究活動に意欲的に取り組む総合的な学習の時間の指導についての基本構想

(1) 探究活動に意欲的に取り組む総合的な学習の時間の指導についての基本的な考え方

本研究では、学習指導要領に掲げられている総合的な学習の時間のねらいを実現させるために、体験的な活動で得た児童の興味・関心を生かしながら主体的・創造的に課題解決させる探究活動の場を積極的に取り入れて意欲化を図っていく。

学習活動を行う際の原動力ともいえる「意欲」は、【表1】に示した要素で構成され、①問題意識②目的意識③自己決定感④充実感・満足感⑤向上心のように学習活動を行う中

で児童の内面に段階的に生まれてくると考える。そこで、本研究では、探究活動に意欲的に取り組む児童の姿を「目的意識をもって活動の全体を見通し、課題解決に向けて計画の修正をしながら進んで調べたりまとめたり自分の活動をふり返ったりする児童」ととらえて研究を進めることとする。

(2) 見通しをもたせる「北っ子プラン」の活用

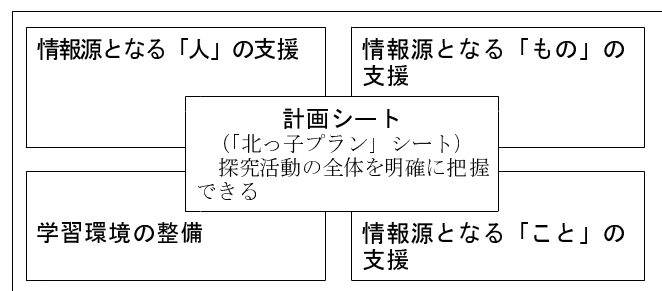
本研究において「見通しをもたせる」とは、活動の目的や課題解決の方法を明確にして自分が行う活動の方向性を決めることである。そのためには、児童が自ら取り組んだ活動をふり返って自分の立てた計画を見直し、必要に応じて計画を修正して次の活動の見通しをもたせることが大切である。このような活動を繰り返し経験することにより、児童は自分の意志で学習しているという意識を高め、探究活動に意欲的に取り組むことにつながれると考える。

また、児童に見通しをもたせるためには、課題解決の方向性が明らかにできるような教師の支援が必要である。その支援として、「北っ子プラン」を取り入れることを考えた。「北っ子プラン」とは、【図1】に示したように児童自身が探究活動の全体を明確に把握できるような計画シートを中心とし、情報源となる「人・もの・こと」や学習環境などを整えた支援の計画である。

本研究で活用する計画シートは次頁【図2】に示したような目的をもったシートである。

【表1】探究活動に意欲的に取り組む児童の構成要素

構成要素	構成要素の意味
問題意識	身近な事物や事象を対象とした体験活動をする中で感じられた疑問や興味・関心
目的意識	課題や課題解決の方法、自分の役割を明確に見通した計画を立てて、主体的・創造的に取り組もうとする意識
自己決定感	計画を基に活動内容を自分の意志で決定し、活動しようとする意識
充実感・満足感	探究活動をとおして感じられる楽しさややりがい
向上心	学習の成果を誰かに伝えようとしたり、新たな課題に取り組もうとしたりする意識



【図1】「北っ子プラン」

①自分の内にある問題意識を顕在化させる。

②顕在化した問題意識の中から課題を選ばせ、目的意識を明確にさせる。

⑦調べたことを誰かに伝えようとする意識をもたせる。

北っ子学習の計画 (北っ子プラン)

*課題を通して感じたこと・考えたこと・思ったこと

③同じ考えをもった友達同士のグループづくりに役立たせる。

④具体例を参考にして解決方法を決定し、探究活動の大筋をつかませる。

⑥探究活動の日程の見通しをもたせる。

⑤自己評価の観点として活用させる。

未来の自分へのメッセージ

「北っ子プラン」第1シート (全体の計画に活用)

①第1シートで記入した課題を再度記入させ、具体的な計画の立案に役立たせる。

②課題の結果を予想することで、探究活動の手順の見通しをもたせる。

④探究活動で使用するものを明らかにさせる。

⑤自分の役割を記入させ児童が自分で行う活動の方向性を明らかにさせる。

③予想を基に解決する方法の手順を記入し、今後の活動を明らかにさせる。

⑥1単位時間の学習内容を自己決定させ、今日の活動の見通しをもたせる。

⑦活動のふり返しをして、今日の活動の成果や課題を明らかにし、計画の継続や修正に役立てる。修正した計画を⑥の学習予定の欄に記入させる。

⑧児童へのアドバイスを教師が記入し、意欲化を図る。

「北っ子プラン」第2シート (単位時間の計画に活用)

【図2】「北っ子プラン」シート

このシートを探究活動に取り入れることによって、児童に自分の内面にある考えや思いを顕在化させたり、

「計画の修正を図って、よりよく課題解決しよう」という意識をもたせたりする効果が期待できると考える。そして、【表2】のような情報源となる「人・もの・こと」や学習環境の整備を行うことによって、児童が見通しをもって探究活動に取り組むことができると考える。

【表2】情報源となる「人・もの・こと」や学習環境の整備

情報源となる「人・もの・こと」		学習環境
人	学習協力者、専門家の紹介（氏名・電話番号・メールアドレス）	<ul style="list-style-type: none"> 児童の興味・関心や身近な地域の特性に基づく体験活動の場の設定や展開の工夫 「お願いカード」を利用した児童の要望の受け入れ 児童同士の相互評価及び教師による評価を効果的に進める発表の場の設定 自分で決めた評価の観点（「活動でめざすこと」）のふり返りの場の設定 これからの総合的な学習における展望をもたせる工夫（未来の自分へのメッセージ） 児童の作品の展示場作り
もの	本（図鑑や事典）、コンピュータ（ソフト・インターネット）、実物（模型・標本）の紹介	
こと	実験・観察の仕方、インタビューの仕方、コンピュータの活用などの指導	

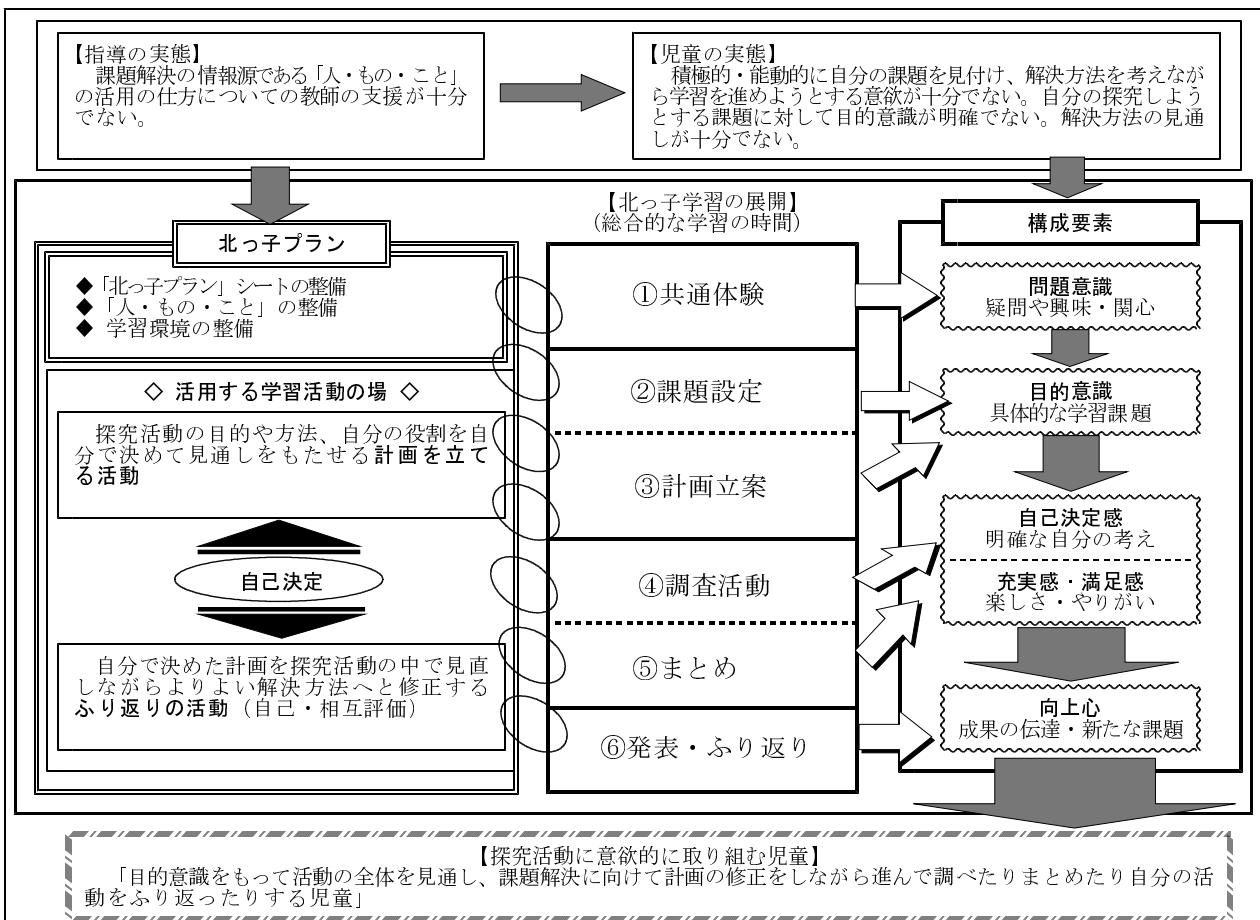
この「北っ子プラン」は、学習過程の各段階（共通体験、課題設定、計画立案、調査活動、まとめ、発表・ふり返り）で【表3】に示したように活用していく。

【表3】見通しをもたせる「北っ子プラン」を活用した学習活動

段階	活用の仕方
共通体験	新たな疑問や興味・関心が抱けるような体験の場の設定や体験活動の展開の仕方の工夫を行う。
課題設定	課題解決の情報源である「人・もの・こと」の整備として、学習協力者の紹介や探究活動（調べ方・まとめ方・発表の仕方）の具体例の紹介を中心に行う。
計画立案	課題の予想を立てさせたり、教師の作成したガイドブックを参考にさせながら解決方法の手順、自分の役割、使用するものなど具体的な計画を立てさせたりする。
調査活動	教師が児童の計画を把握しながら、人や本・コンピュータなどの情報源の整備を行い、個々に応じた支援をしていく。その際に児童の要望に応えるために「お願いカード」の活用を行う。
まとめ	調べた結果を誰に伝えたいか児童自身に考えさせ、効果的なまとめ方・発表の仕方を紹介しながら工夫したまとめ方にするための支援を行う。
発表・ふり返り	発表の場の設定を工夫したり、児童に学習の過程を想起させたりするような学習環境を整備し、児童に学習の成果や「自分のよさ」を自覚させ、新たな展望をもたせる。

(3) 探究活動に意欲的に取り組む総合的な学習の時間の指導に関する基本構想図

これまで述べてきた基本構想についてまとめたものが【図3】の基本構想図である。



【図3】基本構想図

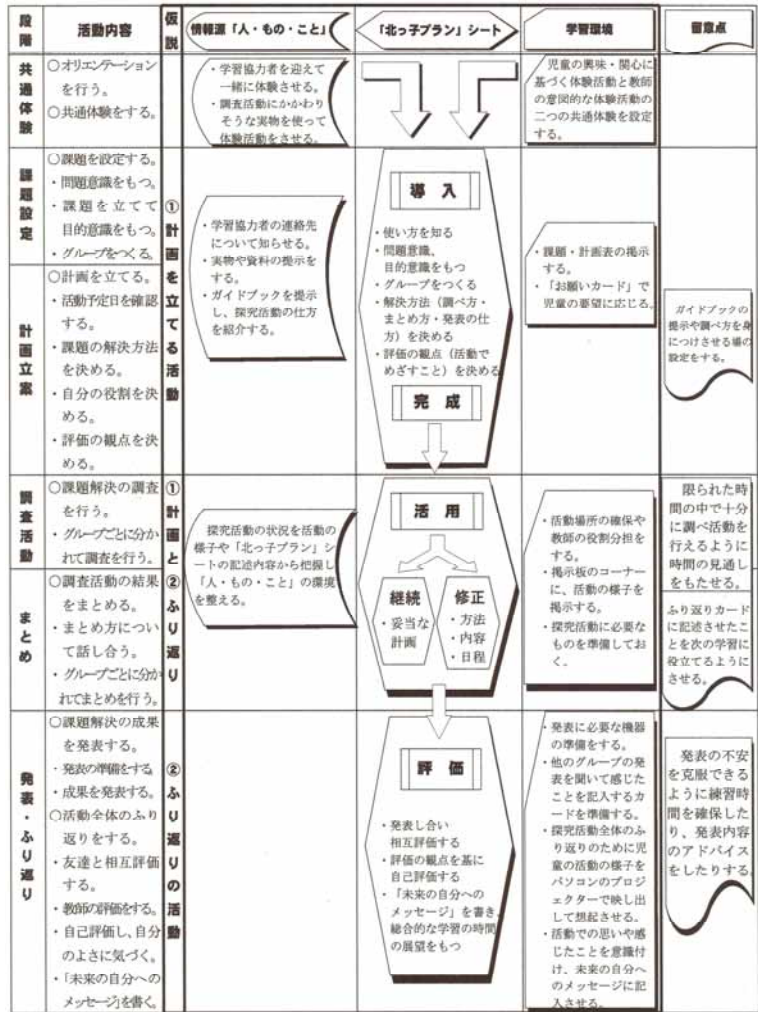
2 手だてにかかわる実態調査及び調査結果の分析と考察（本資料においては省略する）

3 見通しをもたせる「北っ子プラン」の活用を取り入れた手だての試案

基本構想及び実態調査の分析から明らかになった手だての試案に生かす配慮事項を次のようにおさえた。

- ・限られた時間の中で十分に調べ活動を行えるように、活動時間の見通しをもたせること
- ・調べ方が分からない児童への支援として、調べ方を身に付けさせるための学びの場を取り入れたり、調べ方のガイドブックを効果的に活用させたりすること
- ・ふり返りのさせ方を工夫し、児童が記述したことを次の学習に役立てられるようにすること
- ・発表することに不安をもつ児童に対して自信をもたせるための支援を行うこと

これらの配慮事項を生かし、見通しをもたせる「北っ子プラン」の活用を取り入れた総合的な学習の時間の手だての試案を【図4】のように作成した。



【図4】手だての試案

(3) 検証計画

基本構想で述べた見通しをもたせる「北っ子プラン」の活用を取り入れた総合的な学習の時間の手だての試案の妥当性について、【表4】に示した検証計画に基づいて検証する。

【表4】検証計画

検証項目	検証内容	検証の方法	処理の方法
探究活動に意欲的に取り組む児童の意識の変容の状況	・問題意識 ・目的意識 ・自己決定感 ・充実感・満足感 ・向上心	・事前と事後に質問紙による意識調査を行う（質問紙法）	・質問紙法により、指導実践の事前と事後の探究活動に意欲的に取り組む児童の変容の状況をχ ² 検定（変化の検定）を用いて分析し考察する
各段階における探究活動に意欲的に取り組む児童の意識の状況	・問題意識 ・目的意識 ・自己決定感 ・充実感・満足感 ・向上心	・検証内容に関する観察事項について学習活動中の発言や行動を観察する（観察法） ・学習活動の終末に行う「ふり返り」での「北っ子プラン」シートへの記述文から判断する	・児童一人一人の探究活動に意欲的に取り組む姿の状況について、学習活動中の発言や行動、「北っ子プラン」シートの記述内容について判断基準を基に分析し考察する

4 指導実践

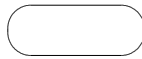
指導実践は、大槌町立大槌北小学校第4学年児童（男22名、女19名、計41名）を対象に、「大槌川、再発見！」をテーマとして全30時間行った。そして、この実践のねらいを大槌川について自然・産業・文化・歴史などの様々な視点から問題に気付かせ、児童が探究活動に意欲的に取り組めるようにすることとして行った。次頁に指導実践の概要を示す。

段階 仮説 1 : 探究活動の目的や方法、自分の役割を自分で決めて見通しをもたせるための計画を立てる活動

課題設定・計画立案



教師の支援



児童の様子

1 以下の支援を行いグループごとに全体の計画を立てさせて、探究活動の見通しをもたせた。



グループでの話し合いの様子

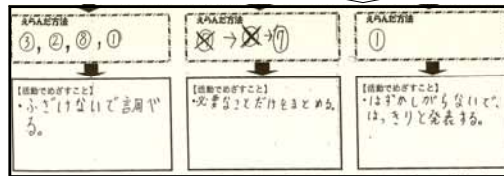


「お願いカード」を使って児童の要望に応じた。

児童が作成した「北っ子プラン」第1シート



児童の記入したシート



「北っ子プラン」第1シートを使って、探究活動の全体の見通しをもたせた。



情報源となる「人」の紹介をした。



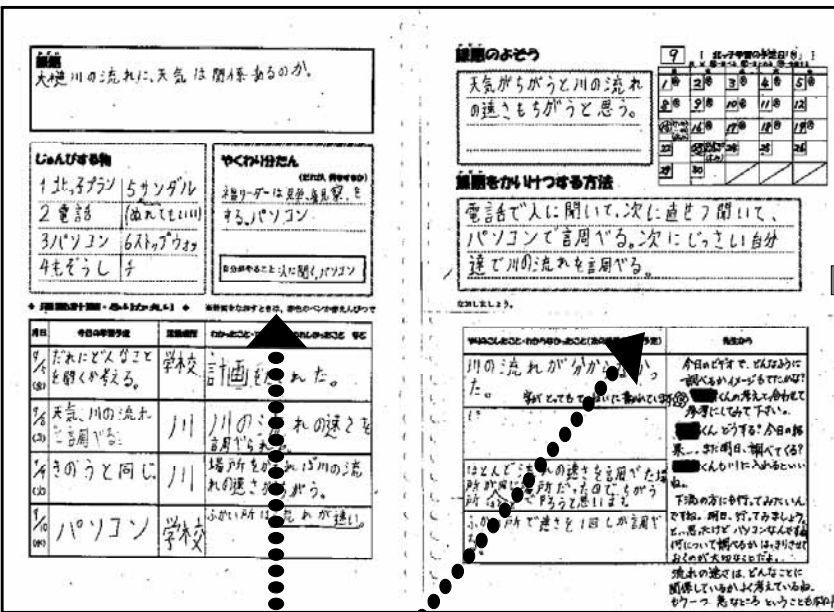
児童が作成しやすいように自己評価の観点例を板書で示した。

2 全体計画を基に単位時間の計画を立てさせ、活動に取り組ませた。

第2シートを使って全体計画を具体化させ、単位時間の見通しをもたせた。

川、コンピュータ室、図書室とそれぞれの調査活動場所に別れて計画に基づく活動に進んで取り組んでいた。

児童が作成した「北っ子プラン」第2シート



調査活動 (川グループ)

活動場所の確保をし、三人の教師が分担して各活動場所毎に「人・もの・こと」の支援を行った。



まとめの活動 (川の石グループ)

方法の手順を決めたりグループの中で役割分担したりと効率よく調査できる計画を立てていた。

調べたことを効果的に伝えるまとめ方をグループごとに考えて工夫していた。

調査活動・まとめ



教師の支援



児童の様子

1 単位時間の終末にふり返りの時間を確保し、活動の成果と課題を明らかにさせた。



ふり返りをする児童

グループのリーダーが司会を務め、その日の活動をふり返った。話し合いでは一人一人が意見を出し成果と課題を明らかにしていた。

児童の活動に対する助言や賞賛を教師が記入し意欲化を図った。

成果

課題

活動のふり返りをしよう

- ①これから今日のふり返りをします。
- ②はじめに、自分の北のつプランシートに書いてください。
- ③書き終わりましたか？
- ④今日の活動で「できたこと」や「分かったこと」はありますか？
- ⑤反対に、今日の活動で「できなかったこと」や「分からなかったこと」はありますか？
- ⑥では、この次の北のつ学習で私たちのグループでは「○○」についてがんばりましょう。
- ⑦先生に何かお願いしたいことはありますか？
- ⑧これで、△△グループのふり返りを終わります。

月日	今日の学習予定	活動結果	わがまことできごと・うれしかったこと、など
9/4	たねとよみかきとを聞くかきえる。	学校	言叶をたてた。
9/5	天気、川の流れるを調べる。	川	川の流れる速さを言明された。
9/6	きのこのと同じ。	川	場所をかえれば川の流れる速さが変わる。
9/7	パソコン	学校	ふがいしは流れるが速い。

月日	今日の学習予定	活動結果	課題
9/4	たねとよみかきとを聞くかきえる。	学校	言叶をたてた。
9/5	天気、川の流れるを調べる。	川	川の流れる速さを言明された。
9/6	きのこのと同じ。	川	場所をかえれば川の流れる速さが変わる。
9/7	パソコン	学校	ふがいしは流れるが速い。

その日の課題を次の計画に修正して立てていた。

ふり返り進行カード

成果と課題を一人一人が自分のシートに書き込み、課題は次の活動予定とし、計画の修正を加えていた。このようなふり返りを継続して行うことにより、次の活動をしつかりと見直し、意欲的に活動していた。

2 単元の終末に自己評価の観点についてふり返りをさせ、自分のよさを自覚させて新たな展望をもたせた。



自信をもって発表する児童

自分たちの伝えたい相手を意識し、自信をもって発表していた。発表を聞いていた児童は、伝えたい相手に伝わるかどうか考えて、質問や意見を出し合い相互評価していた。

新たな展望を記述した未来の自分へのメッセージ



自分の決めた観点に沿って自己評価する児童

一人一人の児童が「調べる・まとめる・発表する」のそれぞれの観点についてふり返り、具体的に記述していた。

活動でめざすことのふりかえり

調べる	まとめる	発表する
あきらめずに調べ分りやすくまとめる。	あきらめずに調べ分りやすくまとめる。	あきらめずに調べ分りやすくまとめる。
あきらめずに調べ分りやすくまとめる。	あきらめずに調べ分りやすくまとめる。	あきらめずに調べ分りやすくまとめる。

児童が記述したふり返りカード

未来の自分へのメッセージ

1年後の自分へ
 五年生になつて、川のことがよく調べる。今よりもっとわくわく生き物のことや調べたら、水から氷まで調べて、魚の仲間もいろいろ調べたい。1年後の自分、がんばれ!

9月25日

ふり返りでは、プロジェクターを使って児童の活動の様子を上映し、活動の想起に役立てた。

5 実践結果の分析と考察

指導実践による探究活動に意欲的に取り組む児童の意識の変容状況をみるために、検証計画に基づいて対象児童39名について、実践結果の分析と考察を行った。【表5】は、構成要素にかかわる探究活動に意欲的に取り組む児童の意識の事前と事後の変容状況をまとめたものである。その結果、全15問中六つの設問（問8・9・11・12・13・14）で有意差がみられた。これらは、「自己決定感」「充実感・満足感」「向上心」についての設問である。この結果を受けて次のように考察を行った。

(1) 「問題意識」の変容状況

「問題意識」の変容は、有意差がみられなかった。これは、事前の調査の段階でほとんどの児童がプラス反応だったことと、共通体験の場の設定で、児童が「不思議だな」と感じられるような活動が十分でなかったからであると考えられる。

しかし、共通体験の段階における児童の状況を判断基準に基づいて判断した結果、【図5】の円グラフで表したように全ての児童が「A」または「B」の判定であった。これは、体験活動を取り入れる支援として、児童の興味・関心に基づく自由遊びの活動と教師の設定するウォークラリーの二つを取り入れた活動を行ったことが、児童の問題意識を促すことに効果があったからであると考えられる。

(2) 「目的意識」の変容状況

この構成要素の状況についても「問題意識」の変容状況と同様に、有意差がみられなかった。それは、課題設定の段階で「はてな？発見」カードにより児童の問題意識を焦点化したものより具体的な文言で課題文を考えさせる教師の支援が十分でなかったことによるものと考えられる。

しかし、設問4にあつては9名の児童が、設問5及び設問6にあつては6名の児童がプラス変容を示しており、目的意識が向上の傾向にあると考えられる。

また、課題設定・計画立案の段階の児童の状況においては、判断基準に基づいて判断した結果、【図6】に示すとおり、95%の児童が「A」または「B」の判定であった。このことは、児童が体験活動で発見したことの中で、自分の興味・関心の高いもの「一番気になること」を選び、課題として「北っ子

【表5】探究活動に意欲的に取り組む児童の意識の変容

観測		設問			N=39		χ ² 検定
前	後	+	-	計	χ ²		
問題意識	1	あなたは、体験活動をしてみて「ふしぎだな」と思うことがありますか。	+	23	6	29	0.00
			-	6	4	10	
			計	29	10	39	
問題意識	2	あなたは、体験活動をしてみて「おもしろそうだな」と思うことがありますか。	+	36	0	36	1.33
			-	3	0	3	
			計	39	0	39	
問題意識	3	あなたは、体験活動をしてみて「調べてみたいな」と思うことがありますか。	+	30	3	33	0.44
			-	6	0	6	
			計	36	3	39	
目的意識	4	あなたは、「どんな課題を解決するか」はっきりさせて取り組んでいますか。	+	26	3	29	3.00
			-	9	1	10	
			計	35	4	39	
目的意識	5	あなたは、「今日の学習で自分はどうなことをするか」自分の役割をはっきりとさせて取り組んでいますか。	+	31	2	33	1.13
			-	6	0	6	
			計	37	2	39	
目的意識	6	あなたは、「自分から進んで活動しよう」と考えていますか。	+	30	1	31	2.29
			-	6	2	8	
			計	36	3	39	
自己決定感	7	あなたは、「調べてみたい課題」を自分で決めていますか。	+	29	2	31	1.13
			-	6	2	8	
			計	35	4	39	
自己決定感	8	あなたは、「どんな方法で課題を解決するか」を自分で決めて取り組んでいますか。	+	22	2	24	9.00
			-	14	1	15	
			計	36	3	39	
自己決定感	9	あなたは、「いつ、どんなことをするか」自分で活動計画を立てて取り組むことができますか。	+	27	0	27	9.10
			-	10	2	12	
			計	37	2	39	
充実感・満足感	10	あなたは、学習活動を楽しんで取り組んでいますか。	+	36	1	37	0.00
			-	2	0	2	
			計	38	1	39	
充実感・満足感	11	あなたは、課題を解決したとき「調べて良かった」と感じますか。	+	30	0	30	7.11
			-	9	0	9	
			計	39	0	39	
充実感・満足感	12	あなたは、自分の課題について調べたとき「ためになった」と感じますか。	+	29	0	29	6.13
			-	8	2	10	
			計	37	2	39	
向上心	13	あなたは、学習の終わりに「新しい課題について、もっと調べてみたい」と思いますか。	+	28	0	28	6.13
			-	8	3	11	
			計	36	3	39	
向上心	14	あなたは、自分たちの学年だけでなく、他の学年の人たちにも学んだことを伝えたいと思いますか。	+	15	1	16	12.25
			-	15	8	23	
			計	30	9	39	
向上心	15	あなたは、家族や地域の方々、学習でお世話になった方々に学んだことを伝えたいと思いますか。	+	24	1	25	4.00
			-	8	6	14	
			計	32	7	39	

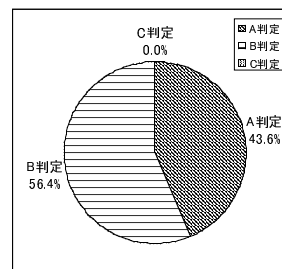
【注】(1) 事前調査は8月26日、事後調査は9月24日に実施したものである。

(2) +としてとらえたのは、質問紙でアまたはイと回答したもの、-としてとらえたのは、ウまたはエと回答したものである。

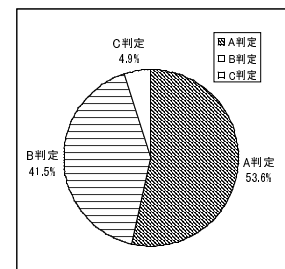
(3) *は有意水準5%で、有意差があることを示す。

(4) χ² 検定で用いた公式は、下記に示すとおりである。なお、bは-反応から+反応へ、cは+反応から-反応へ変わった数を示す。

$$\chi^2 = \frac{(b-c)^2}{b+c} \quad \text{ただし } b+c \leq 10 \text{ のとき} \quad \chi^2 = \frac{(|b-c|-1)^2}{b+c}$$



【図5】問題意識の変容状況



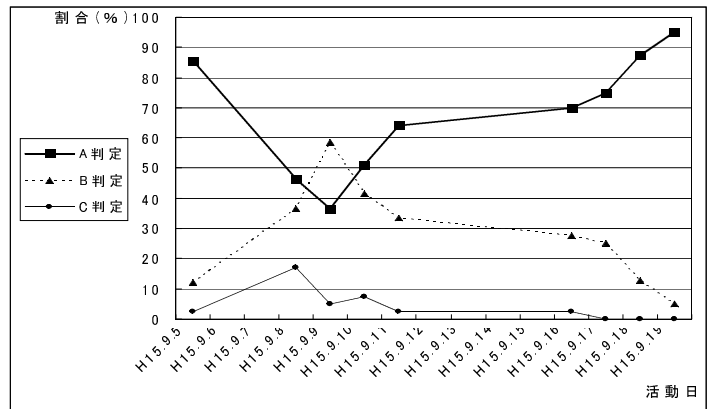
【図6】目的意識の変容状況

プラン」シートに記録できたためであると考え。さらに、教師の支援として学習協力者の紹介や「調べ方・まとめ方・発表の仕方」の探究活動の具体例をガイドブックとして提示し、児童に明確な見通しをもたせることができたからであると考え。

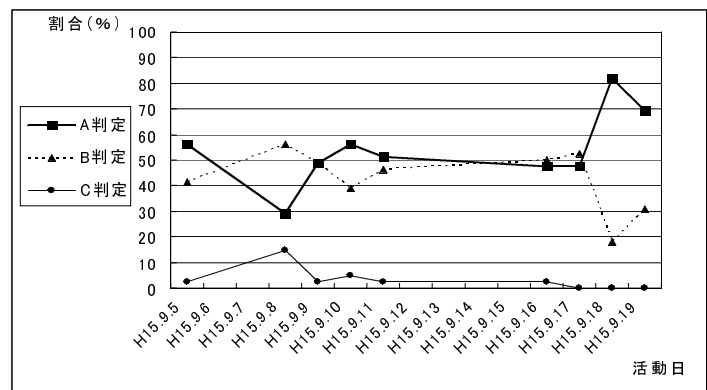
(3) 「自己決定感」の変容状況

「自己決定感」については、設問8・9において有意差がみられた。これは、課題解決の方法の例示をしたことや予め日程を明らかにして提示したことが、児童自身の計画決定に有効に活用され、その効果がみられたからであると考えられる。

【図7】は、9月5日から9月19日まで行った調査活動・まとめの段階の活動状況を判断基準に基づいて判定した結果である。このグラフをみると、9月9日に「A」判定の割合が下がるものの、その後は上昇していることが分かる。これは、児童が毎時間の終末にふり返りを行ったことで、活動の成果と課題を明らかにすることができ、次の時間の活動を自己決定して見通すことに効果があったからであると考えられる。



【図7】自己決定感の変容状況



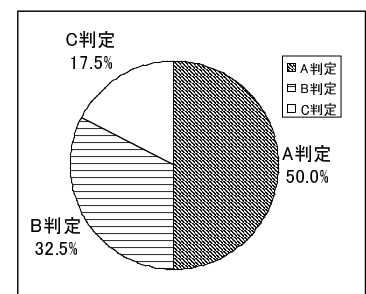
【図8】充実感・満足感の変容状況

(4) 「充実感・満足感」の変容状況

「充実感・満足感」については、設問11・12において有意差がみられた。これは、児童の課題解決が図られ、身近にある大槌川について新しい発見ができたり、新しい探究の仕方を習得できたことが理由であると考えられる。また、判断基準に基づいて児童の状況を判定した【図8】のグラフからも分かるように、「A」判定の児童が増加し、「B」・「C」判定の児童が減少していることが分かる。これは、「北っ子プラン」シートに記入することで児童が活動内容をしっかり把握し、次の時間の見通しをもたせたことやその日の活動をやり遂げたり、やり残した活動があっても「次の活動日にはやり遂げるぞ」という意志をもって活動していたことがかかわっているからであると考えられる。しかし、設問10においては変容がみられなかった。それは、事前調査の時点で既にプラス反応を示しており、設問に検討の余地があると考え。

(5) 「向上心」の変容状況

この段階では、「自分が調べたことを誰かに伝えたい」という思いを児童が大切にできるように、個々の児童に予め「伝えたい相手」を明確にもたせたり自己評価の観点として自分で立てた「活動でめざすこと」をふり返らせたりしたことが、設問13・設問14のプラス変容に効果的であったと考え。また、判断基準に基づいて判断した結果においては、【図9】に示すとおり82%の児童が「A」または「B」の判定であり、「北っ子プラン」を活用した効果が概ね表れたといえる。これは、児童に「未来の自分へのメッセージ」を書かせることにより、今後の総合的な学習の時間の新たな課題



【図9】向上心の変容状況

が明らかになり、次の学習活動の展望をもたせることにつながったからであると考えられる。しかし、「C」判定の18%（7名）の児童は、具体的に新たな課題を自分で見つけることができなかった。それは、「自分が調べたことで満足し、特に誰かに伝えたいことがない」という気持ちが表れたためであると考えられる。

6 探究活動に意欲的に取り組む総合的な学習の時間の指導に関する研究のまとめ

これまで述べてきた指導実践や実践結果の分析と考察から明らかになった成果と課題が次のとおりである。

(1) 成果

- ア 「北っ子プラン」を活用することによって課題や解決方法が明確になり、方法の手順、活動時間、活動日程などの見通しをもたせることができ、探究活動に意欲的に取り組むことにつながったこと。
- イ 調査活動・まとめの段階において、それぞれの児童が自分で活動のふり返りを行うことにより、その日の成果や課題が明らかになり、充実感・満足感を味わったり次の学習の見通しをもつことができたこと。
- ウ 計画立案の段階で決めた自己評価の観点を明記させたことが、児童にとって活動中の目標となり、その観点についてふり返ったときに具体的に自分のよさを発見することにつながったこと。
- エ 「北っ子プラン」を活用するために教師の支援内容を予め計画していたことにより、児童の活動に対して適時に支援を行うことができ、活動への意欲を向上させることができたこと。

(2) 課題

- ア 共通体験の段階において、児童に「不思議だな」と感じさせるような体験活動の内容や展開の仕方をさらに工夫すること。
- イ 課題設定の段階において、共通体験をして感じた児童の思いや考えを具体的な課題へと結び付けられるような支援の方法を明らかにすること。

以上のことから解決方法を決めることや活動の計画を立てることの「自己決定感」、「調べて良かった・役に立った」などの「充実感・満足感」「向上心」のそれぞれにおいて、見通しをもたせる「北っ子プラン」の活用は、探究活動に意欲的に取り組む児童を育てる上で概ね効果があるという見通しをもつことができた。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本研究は、見通しをもたせる「北っ子プラン」の活用をとおして探究活動に意欲的に取り組む総合的な学習の時間の指導について明らかにし、小学校における総合的な学習の時間の指導の向上に役立てようとするものであった。そのために、基本構想に基づき手だての試案を作成し、指導実践を行った。その指導実践の結果に基づき、手だての試案の妥当を検討した結果、仮説の有効性を確かめることができ、探究活動に意欲的に取り組む総合的な学習の時間の指導についてまとめることができた。

2 今後の課題

今後は、意欲の高まりとともに自ら問題を見つけ、よりよく解決していける学び方を児童に身に付けさせるためのよりよい指導を充実させるように努めていきたい。

【参考文献】

- 有園 格・小島 宏編著 「小学校の総合的な学習」 ぎょうせい 1999年
- 鈴木 誠著 「学ぶ意欲の処方箋」 東洋館出版社 2002年